

へソまがり太平記



Salaried
man
books

サラリーマン・ブックス

ヘソまがり太平記

定価 270円

昭和39年10月20日 第1刷

著 者 ©藤 島 泰 輔

発行者 鈴 木 敏 夫

印刷者 柳 川 太 郎

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 読 売 新 聞 社

東京都中央区銀座西3の1東京(567)1111(大代表)

大阪市北区野崎町77 大阪(361) 1391~9

表紙用紙 東洋クロス株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

製本所 藤田製本株式会社

へソまがり太平記

藤 島 泰 輔



読売新聞社

除籍

まえがき

展覧会に行けば団体客でござったがえしている。外で食事をすれば社用族がはびこっている。海外旅行をするにも隊伍たいごを組まなければ出かけない世の中である。

個人の存在、無名の一市民の存在はどこに行ってしまったのであろうか。

戦後二十年たって、世間はサラリーマン全盛となり、十歳の児童までが、わが身の行く末は安定したサラリーマン生活と決め込んでいる時代になった。それが悪いというのではないが、いかにも味気ない。つまらない。夢がない。

個人を主張する人間は、画一的な人間たちの陰にかくれて姿が見えなくなった。

頑がんとして自己を貫こうとする人間は時代遅れなのであろうか。あるいは現代のドン・キホーテなのであろうか。

「ぼくはヘソまがりじゃない。世間がまがっているのだ。ぼくは当たり前のことをいったりしたりしているだけだ」

と、親父おやじはいった。

「私は意地の悪い言葉で他人をいじめようとしているのではない。自分の生活を守るのに必要なことだけをいっているのです」

と、三上亮作氏はいった。

それでも世間の人から見ればヘソまがりである。明治生まれの頑固者がんこと思われる。

息子むすこの私から見ても、親父はやはり変わっている。ふだん、普通の人ばかりながめて暮らししているせいであろう。かつては喧嘩けんかばかりしている親子であった。

息子が親父を認めるようになったのは、息子が年齢としを取ったためかも知れないし、またそれが親子というものなのかも知れない。

一生書かなかったかも知れぬ親父の生活をこのように早い時期に書くことになったのは、やはり私自身が現代の世相にかなりの抵抗感をいだいているためであろう。

「長いものには巻かれろ」という日本的な諺ことわざが現代ほど現実感を持っている時代はない。長いものに巻かれていれば、安楽に暮らせると信じ込まれている世の中である。

親父の他に、三上、麻生、加藤の三氏が登場するが、いずれも長いものに巻かれずに半生を
過ごした人々である。その特徴のある生き方の背後にひそむ徹底した個人主義というものに、
私は限らない憧憬どうけいと愛着を感じている。

一九六四年八月

藤島 泰輔

目次

まえがき

親父がへソをまげるとき.....	9
親父のきらいなもの.....	20
親父のへソのうらおもて.....	31
親父のへソのまがり始め.....	43
へソまがりとはヒマがある.....	55
へソまがり闘争.....	68
いちゃもんの研究.....	79
特別製の親父をもてば.....	91
へソまがり三代.....	103

さか立ちの武さん……………	115
へソまがり人口過剰論……………	126
じょうぶで長持ちのへソまがり……………	138
へソまがりは急がない……………	149
へソまがりは自家製がお好き……………	161
へソまがりのおつきあい……………	173
へソまがり六万石……………	187
へソまがり探検業……………	199
へソまがりは極端なことをいう……………	212
へソまがりイナゴ退治……………	225

これは「週刊読売」昭和三十九年四月五日号より同年八月十六日号に連載されたものに、一部手を加えてまとめたものである。なお、昭和四十年新春より日本テレビで連続ドラマ化が決定している。

―編集部

親父がヘソをまげるとき

★ベレーとパイプ

ある晩、銀座裏で中屋健一氏にばったり会った。なにしろ、私を赤ん坊のころからよく知っている人なので、このがらの悪い東大教授には、てんで頭が上がらない。

「親父は元氣か？」
おやじ

「六十八にもなって、あい変わらずベレーをかぶって、パイプをくわえて、人の行かない山ばかり登っています」

「ふむ」

やっぱりそうかという顔であった。

「ところで、お前さん、いくつになった？」

「三十ですよ」

「もう、そんなか。三十年ねえ……あのヘソまがり親父と三十年も暮らしたら、さぞくたびれ

るだろうな」

と、旦那はひどく感心した。

変なことに感心する人だと思つて、つくづく顔を見たが、考えてみれば、そういう中屋氏だつて、ヘソがまっすぐついているほうとはいえない。毒舌にかけては定評のある人だから、よく親父もヘソまがりなんだなと思つた。だいたい、息子むすこから見れば、親父という存在は頑がん固なものと相場が決まっているが、わが家の場合はそれが飛び切りということらしい。

他にも、親父の知己に会うことは多いが、たいてい、いわれることは同じである。

「あの憎らしいおっさんは、達者かい？」

「あれでよく銀行が勤まつたねえ」

「きつと百まで生きるぜ」

「舌ガンにならないようにいっとけよ」

たしかに、いうことは、ことごとく憎らしいのである。

気の弱いおふくろは、親父と外出するたびにはらはらしている。バスに乗って交差点にさしかかると車掌が声をはりあげる。

「揺れますからご注意ください」

間髪を入れず親父がどなる。

「東京の中で、どこか揺れないところがあるかね」

おふくろは、しきりに親父のそでを引っぱるが、いっこうに意に介しない。

「こみ合いますから奥にお詰めください」

「入り口でも奥でも料金は同じだよ。ほら詰めた、詰めた」

電車に乗っても同じである。横須賀線など、空電車の座席に向かって人々が殺到し、からだの小さい親父などは軽くはじき飛ばされる。とたんに

「うちへ帰ると、満足な椅子いすもないんだろう。かわいそうな人たちだ」

という。こんなことの連続だから、帰宅すると、おふくろはへとへとになるわけだ。

★働き過ぎるな

だれかがいった通り、親父が三十五年間も日本銀行に勤めていたというのは不思議でしょうがない。およそ出世しないだろうといわれ、事実、同期の間では昇給がもっともおそかったそうだが、どういうわけか戦後には重役の端くれになった。これが、監事というひどく気楽なボジションで出勤は週一回、他に何もしないで九年間日銀監事という新記録を作って昭和三十一年に引退した。その後は月一回という閑職にいたただけで他に何もしようとしなかった。

「日本人は働き過ぎる。食えさえすればそれでよい」

というのが持論で、同じ年の人が働き過ぎて次々に亡くなると、まめに葬式に出かけて行っ

て必ず「ご主人は働き過ぎでしたな」と悔やみを述べる。

日銀にはいった当時も「十働けばよいところを十二働くのはバカだ」といって、けっして居残りをしなかった。日銀は終業のベルのかわりに守衛が拍子木を鳴らして歩くしきたりになっているが、親父は時間の五分前ぐらいに机の上を片づけておいて耳を澄まし、一階でかすかに拍子木が鳴るとパツと勢いよく立ち上がった。

「仕事を怠っているのではない。勤務時間の中で与えられた仕事を全部済ますようにしているのだから、なにもいわれる筋合いはない」

と、親父はいうが、日本の会社がそれで通用するはずはない。おまけに、銀行の上役や同僚とつきあうのがひどくきらいで、慰安旅行にはついに一回も行かなかった。

「だだっ広い座敷に、月給順にすわって飯を食うなんて、まっぴらだ」

と、旅行のときは、一人で山登りに出かけた。同僚のほうでも考えて、あるとき幹事に指名したが、親父はいいさいの手はずを整えた上で、前日になって同行を断わった。幹事のいない慰安旅行というのも妙なものだったろう。

私が物心がついたのは、親父がバリ駐在のところで、もうベレーをかぶって、パイプをくわえていた。よほど、暇な地位に縁があったとみえて、このときも、しょっちゅうスイスの山へ出かけていた。パリは、ヘソまがり親父の体質にもっとも適した場所であつたらしい。その後の

言動の根拠となる思想は、ほとんどパリ時代につちかわれたフシがある。

「フランスでは、銀行員はもっとも身分の低い職業の一つだ」

と、戦後の大学卒業生が銀行に殺到する風潮を嘆いて、いったことがある。

戦争中は、はじめから「負けるに決まっている」と、どこに行ってもいいうので、祖父にさえいやがられた。熊本の支店長時代、私は親父の受け売りで、小学校の教室に行つて「この戦争は負けるよ」ともらして同級生にボイコットされた。

あい変わらずベレーとパイプを離さないの、特高や憲兵には年中調べられた。

★一高・東大・脳膜炎

あるとき、まだ本店の検査役をしていたときだが、長崎の銀行を調査に行つた帰り、博多から特急の展望車に乗った。列車が下関を出ると、明らかに特高とわかる男が二人、親父のそばへ来ていろいろとたずねた。

「どういう用件で長崎へ行つたのですか？」

「長崎の十八銀行を調べに行つたのです」

「お名刺を拝見できますか？」

親父は名刺を出して机上に置き、人さし指で名刺を押えた。相手に渡すのがいやなのである。「あなたがたの名刺も見せてください」

相手も名刺を出したが、案の定、特高の刑事であつた。

「ほう、日銀ですか。ところで、学校はどちらです？」

「あなたがたにいえるようなりっぱな学校は出ていません」

「しかし、参考までに……」

「東京帝国大学……」

「ほう、帝大を出て日銀なら、りっぱなもんじゃありませんか？」

こうなると親父のベースである。

「なにがりっぱですか。実にくだらん経歴だ。われながら恥ずかしい」

「そんなことはありません。いや失礼いたしました」

と、刑事は行きかけた。

「ちょっと待ってください。これだけ多勢のお客がいて、なぜ私だけに質問したのですか？」

「いや、それは……」

刑事は困って、なかなか理由をいわなかったが、こういうときの親父はしつこいので、最後にとうとう音を上げた。

「その帽子とパイプです」

「ほう、それはまた不思議な理由ですな。フランスでは、貴賤きせんを問わず、労働者でも役人でも

ベレーとパイプを愛用してる人はある。あなた、ここがフランスだったら、そういう人たち全部に出身校を聞きますか？」

特高の旦那がたは、ほうほうの体で逃げ出した。

汽車はしかたがないが、電車やバスで軍人が乗ってくると、必ず次の停留所で降りた。私はいっしょにいて、よくまごついた。軍閥と学閥には戦闘心に近い感情を持っていた。

近ごろ、だいぶ流行してきたようだが「一高・東大・脳膜炎」という言葉を発明したのも親父である。本人が一高・東大を出ているのだから、親父がこれを口にする、彼の同級生は露骨にいやな顔をする。同じ新語では「大東京村」というのも言い出し、これは天声人語の荒垣さんに話したらしく、新聞にも紹介された。東京は都会としての機能をまったく備えていないが、大ききだけはバカに大きいという理屈である。

「道路はすべて道路予定地でしかないし、下水道は不完全、糞尿はくみとり、住んでいる人間のほとんどが地方人……」

こんな町はこれでたくさんだ、といって、戦後は毎日リュックサックをかついで日銀へ通った。中身は、途中で読むフランス語の本とか預金通帳とかいったたぐいである。こんな格好で銀行に行って、ことあるごとにイヤミばかりいていたのだから、よくも勤まったといわれるのは当然である。